

## 令和7年度 第1回 京丹波町子ども・子育て審議会 議事概要

日時：令和7年7月14日（月） 午後1時30分～午後3時40分  
場所：京丹波町役場2階 大会議室  
出席委員：18名  
欠席委員：1名

### 1 開会あいさつ

畠中町長あいさつ

### 2 委嘱状の交付

委員1名 代表受領

### 3 委員の自己紹介

### 4 会長・副会長の選出

### 5 会長あいさつ

**会長**：私と副会長は、前期も会長と副会長を務めさせていただき、委員の皆さんにはフランクに発言してもらおうということをモットーにして、2年間で8回の審議会を開催した。その中で、委員の皆さんや事務局の方たちの見守りの中で、回を重ねるごとに親密度が上がり、有意義で居心地のいい審議会になったのではないかと自負している。第3期京丹波町子ども・子育て支援事業計画を策定することができ、2月10日には畠中町長に答申させていただき、副会長と「やり切った。大役がこなせた」と満足感と達成感、自己肯定感に包まれていた。

これからは自分の生活を見直していこうと、審議会からは離れるつもりでいた。何に優先順位をつけてやっていこうと考えたときに、私には90歳代の母親がいて、自立して暮らしている。副会長にも90歳代のお母様がいらっしゃる、1人で暮らしておられる。そこで母のケアを第一に考えていこうと、お互いに毎日母親のもとを通う生活をしていた。大切に育てられたという思いは、大切にしたいという思いに変わる。母とお別れの時が来ると思うが、その時に母に大切にされた分を自分が大切にしていって返せたと、自己肯定感につながっていくための今の時間なんだとお互いに話すこともあった。

その中で、京丹波町の子育ての施策に携わってきた者として、もう少し京丹波町の審議会に参加し、できることがあるのではと思うようになってきた。

再び会長と副会長の職をいただいたので、もう少し頑張りたいと思う。京丹波町の一人として、京丹波町のことが好きだし、審議会を通じて、京丹波町や子どもへの愛、地域への思いがますます深くなった。あと2年頑張らせていただきたいと思うので、ご協力をお願いしたい。

前期の審議会で、第3期京丹波町子ども・子育て支援事業計画が答申できたのは、委員の皆さんがいい雰囲気、忌憚のないご意見をたくさんいただけたことが何よりも励みになった。今年度は第1期子ども計画を策定することになる。未来の京丹波町への想いを膨らませて、素敵なアイデアをたくさんいただきたい。活発な意見交換がされることを祈念して、あいさつとさせていただきたい。

## 6 説明事項

### (1) 第3期京丹波町子ども・子育て支援事業計画の策定に関すること

【事務局による説明】

### (2) 京丹波町子ども・子育て支援事業計画における量の見込みと提供体制、確保方策の進捗管理に関すること

【事務局による説明】

## 7 報告事項

### 第1期京丹波町子ども計画策定に関するアンケート調査の結果について

【事務局による説明】

【質疑応答】

**委 員:** 若者の回収率が15.4%となっているが、この数字は統計学上有効なのか。人間に対する調査なので、答えてくれた15.4%の人はどんな人たちなのか、答えられなかった人にはどんな事情があり、どのような立場の人だったのかまでみていかないと若者の実態は見えてこない。なぜこんなに回収率が低いのか、小中学生は学校で回答できたが、その上の高校生や、家を出て単身で寮などで暮らしている若者がいると思う。実家を離れて暮らしている若者は、短い実施期間では実家に送られてきても本人のもとまで届かなかったのではないかと。また、面倒だから回答しないという人もいたと思う。京丹波町で親と一緒に住んでいる高校生は回答してくれたのか。もう少し踏み込んだ分析が必要だと思う。

**事務局:** 若者アンケートの回収率の低さはほかの自治体も同様に課題となっており、20%未満のところがほとんど。京丹波町でも同様の結果になってしまった。統計学的には、実際の若者の集団とアンケートで答えてくださった方の回答内容の差(標本誤差)が5%未満となることが望ましいとされている。今回の結果では標本誤差が5.7%となり、有意性としては少し低めの結果になった。

10%以上の差があるような回答結果は母集団との違いはないと思っていたけどらと思うが、回答結果の差が5%未満の場合には、仮に全員に聞くことができた場合と比較すると順位が逆転する可能性がある。

**会 長:** 郵送した封筒は届いているのだろうか。皆さん読んでくださったのだろうか。

**事務局:** 追跡はしていないので、実際のところどこまでの方が封筒を開いて読んでくださったのかまではわからない。封筒の中身を見るまで至らなかったのか、封筒を見たが質問数が多くて敬遠されたのか、分析することは難しいが、ほかの調査と比べて回収率は低い。

**会 長:** こども計画が若者支援もしていることや、封筒が届いた若者が自分たちも対象に含まれているということが浸透する方法があればいいと思う。「若者」という定義には小・中学生の保護者も含まれるという理解でよかったか。

**事務局:** おっしゃる通りで、34歳までの方にお送りした。保護者によっては（保護者向け調査票と若者向け調査票の）2種類届いている方もいるので、2通届いた場合は両方に回答してほしいと周知はさせていただいた。

**会 長:** 保護者と若者の両方の対象となっていた委員に尋ねたいが、2種類の調査票は届いたか。

**委 員:** 2種類届いた。親の心理としては、こどもの分は答えてやりたいと思うが、自分の分は後回しになると思う。周りもそのような反応で、開けてもいないという保護者も一定数いらっしやった。同じ調査票なので、どちらかに答えたらいいと思っていたという意見も聞いた。また、先ほどの委員の意見にもあったが、ひとり暮らしや寮暮らししている若者には届いていない。調査票が保護者に届いても、わざわざお金をかけてこどもに送らない。いつ帰ってくるかわからないので、その時まで置いておくこともないと思う。身の回りの感覚だと、大学生や専門学校生はほとんどが本人のもとに届いていないと思う。正月などに実施していれば、帰省していたこどもにも届いていたのではないか。

**委 員:** 自分自身はアンケート対象の年齢を超えているが、届いたらやってみたいという気持ちはある。

**委 員:** WEBで回答しようと思っていたが、スマホでは面倒で回答しなかった。スマホ入力は若者ならすぐにできるが、自分くらいの年代になるとスマホの活用はだんだんできなくなってきた、個人的にはどちらかというパソコンからURLを入力できる選択肢があるほうがいいと思う。

また、アンケートの封筒が届いた時に、気にしている人は中まで見るが、気にしていない人は見ないまま捨ててしまうということもあるし、共働きだったりすると、こどもの分は答えるけど自分の分までは時間がなくて答えられないということはあることかなと思った。若者の回答率の低さは気にはなっていたが、要因を追跡していくのは大変だろうと思う。

**委員**：3人のこどもがいるが、正直こういったアンケートには回答できない。その時間があるならこども達と過ごす時間を設けたいという思いがある。

**委員**：無効票があるが、その理由は何か。

**事務局**：2種類あり、ひとつめは一切回答がないものを白票として無効票としている。もうひとつは、回収期間を過ぎてからの届いた分となっている。回答締め切り後も1か月弱までアンケートを受け付けていたが、年度末までに報告書を完成する必要があり、それ以降の間に合わなかった分は無効票とさせていただいた。ただし、自由記載による回答は内容として含めている。

**副会長**：回答者の年齢層はどうだったのかというところが88ページに載っている。15～19歳が3割近く、30～34歳が3割弱となっていることから、地元にいる高校生は頑張って答えようとしてくれたということは考えられる。

また、設問の中でも国や町の情報をどこから得ているかというところで、若者は情報を入手していないという回答が2割程度になっている。つまり、京丹波町だけではないと思うが、こういうアンケートを自分ごととして捉えられていない、捉えようとしなないという結果だと考えられる。去年までの審議会でも課題になっていたように、若者にも知ってもらおうということに取り組んでいく必要があることがアンケート結果からも浮き彫りになったと思う。

**会長**：こども計画の中に若者支援とあるが、その若者の回答率が少ない。少ない中で封書をあけて回答してくれた若者は京丹波町に期待する気持ちはある。若者の方たちがこども計画の中に若者の支援が含まれていることを知らないで素通りしてしまうのはもったいない。若者支援というのは具体的に何を考えているか。

**事務局**：子ども・子育て支援と重複するが、結婚・子育てへの支援がある。また、就労支援やこれと関連した貧困の状況も踏まえながらの支援も施策の1つ。さらに、ひきこもりといった課題への対応や居場所づくり支援も大事な施策であり、自分が活躍できる場所づくりのような、自己肯定感を高めて生きて行けるような支援も含まれている。

アンケートにはこども・若者と書いたが、若者と言われたときに何歳までと感じるかは個人差があり、アンケートを見た人の中には自分は若者ではないと感じた人もいるかもしれない。施策によっては40歳までを対象とするものもあるので、しっかりと周知していければと思う。

**委員**：アンケートは34歳までだが、国の計画は30代までを含めた計画か。

**事務局**：若者施策の対象は30歳未満の青年期が基本となっている。この他にポスト青年期という年代があり、こちらは40歳までが対象となっている。施策によってはポスト青年期まで支援していきたいと考えている。

**委員**：アンケート対象が34歳までという理由は何か。

**事務局：**就労支援に関連して、ニートへの支援は、国の施策では34歳までが対象となっている。また、ひきこもり支援も同様に34歳までとなっている。これらがポスト青年期の方への国の支援施策の中心となっているため、年齢を合わせることにした。

**委員：**回答者の性別をみると女性の方がはるかに回答している。当初は性別を聞く必要があるのかと思ったが、結果をみると聞くことは大事なのだと思った。このアンケートはこれからの施策の根幹になるくらい大事なものだと思う。町民のみなさんにどれだけ呼び掛けを行ったのか。私自身もアンケート対象の人が身近にいたら個別で呼びかけもできたかもしれない。実際には、ケーブルテレビなどでのPRもしていただいているかもしれないが、アンケートを取るからには、答えてもらうための取組も大事にしていくべきだったのではと思う。

**事務局：**町の広報紙への掲載、京丹波町あんしんアプリで2回の配信、ケーブルテレビの文字放送は行った。広報の仕方や媒体を増やすなど検討していきたい。

**委員：**アンケートのなかでこどもが権利の主体であると書かれているが、権利は何を指しているのか。

**事務局：**子どもの権利条約というものがあり、差別の禁止、こどもの最善の利益、生命と発達に対する権利、こどもの意見の尊重の4つが代表的な権利となっている。これらを持っていることを認識しているかどうかということをお聞きしたい。

**委員：**アンケートの回収率が低かったが、アンケート結果報告書には情報をどこから入手しているかという答えが載っているので、そのあたりを今後を生かしていくなり、予算の問題はあると思うがアンケートを取り直すなり、若者の意見をもう一度取りきらないと、今後どういう施策をとっていったらいいのかということが議論しにくいと思う。町内在住の若者には、区長さんなどが対象の若者に一言伝えればいいのかもしいし、京丹波町にいない若者には、親御さんをお願いしてもらいたい。アンケートを送っただけで終わりということは中途半端だと思う。若者は一番頑張っている世代でありその人たちの意見を聞けていないことは良くないと思うので今後対処してもらえたらと思う。

**委員：**他の委員さんもおっしゃったが、正月期間に実施すればもう少し違う結果になるのではと思った。次回の意見聴取では、今回の方法では回答を確保することが難しいとわかったので、それを前提にどうするか考えていく必要がある。若者の回収率の低さが全国的な課題になっているのなら、時期をずらす、期間を延ばす、若者の意見聴取の研究事例を参考にするなど、他の手法を考えてほしい。次どうするかということに向けて一歩踏み出せたら良いと思う。

**委員：**町の就労支援とは、具体的に何を考えているか。建設業界は若者不足が課題になっている。働き場がないということで町外にでる方も多くなかで、建設業界は広報を頑張っている。業界として何かできたら支援になるのかなと思い質問した。

**事務局：**就労支援策の今後の事業については各部署の取組を取りまとめている途中のため、取りまとめ後の判断になると思うが、効果的な支援を事業として打ち出せるようにしていきたい。現在の就労支援としては、例えば月に1回就職相談を実施している。

**会長：**若者の就労支援や支援策も含め、今後の担い手となる若者は重要なポイントである。若者が京丹波町で生活をしていくための施策、居場所ができるよう支援できる取組施策が必要だと思う。

現時点では、アンケートに目を通してもらえていない、情報が届いていないということも反省材料として、今後何かいい結果がでるように積み上げていきたい。

**委員：**アンケート結果報告書の152ページに自由記述の回答が書かれていて、若者が京丹波町にいたくなるような重要な内容が書かれている。経済面については、仕事がないなら就業マッチングが必要だし、こどもの遊べる場所も、公園の遊具は老朽化で撤去し、ただの広場になっているのが当たり前になってしまっている。出会いの場をつくるといっても、出会える場所がないのが正直な話。中高生はマークスに行こうとなるかもしれないが、年齢が上がると大きいショッピングモールといったところでデートするのが通例なのではないか。京都のど真ん中でいい位置にあるのに、外向きのアプローチが下手だと感じている。商業施設、若者が集まりやすい施設を作ったり、カフェを作ったり、町の行事を増やすなどしていくことが必要。

多世代が交流する機会も、昔はたくさんあったのに今はどんどんなくなっているし、それを開催するのにやれる人がいない。コロナ禍で近所付き合いが希薄になったという背景もあるが、人口減少もそういった状況に拍車をかけている。町外に行っているいろんなことを吸収した若者が帰ってきたくするための施策を進めないといけない。結婚してこちらで仕事ができる環境さえ整えられたら、京丹波町に帰ってくる方もいるだろう。外国人だけを呼ぶのではなく、日本人にもしっかり移住支援を手厚くするなど、支援していくことが必要。いきなりこどもは大人にならないので、人口を増やすには大人を呼び込むしかない。できればこどもと一緒に家族を呼び込める方法をやっていかないといけない。

そして、地元を大事にしてくれている人達が一番大事だと思うのでそこへのフォローもしながら、移住施策を進めて行く必要がある、移住施策は町も頑張っておられるが、現状、住宅が足りないなどの課題もある。予算的などころもあると思うが、移住支援を頑張らないとどんどん衰退していく一方かと思う。

せっかくとった生の声があるので、審議会で話し合いながら良い施策をできるだけ早い段階で実施してほしい。5年計画だからと時間をかけていると、その間に人口は減るし、こどもも育ってしまう。今困っている子育て世代が5年たつともう仕方ないかと思うようになってしまう。支援を受けられなかった負の思いが残ってしまわないように、時間がかかるのはわかるが、少しずつでもできるだけ早く、できる施策から進めていただきたい。

**委員：**京丹波町の外国人人口は2%を超えており、割合としては他の地域と比べて高い。両親ともに外国人でそのお子さんがきょうだいでこども園に通うということも、町内では今後増えていくのではないかと思います。

今後、外国の方なしでは京丹波町の産業は成り立たないのではないかと思います。共生して、安心安全に暮らしていく社会をつくっていくことが大事であり、外国人のお子さんがこども園や小・中学校で人権が守られ、将来を見据えた教育が受けられる京丹波町を目指していきたいと考えている。

国際交流協会ではオーストラリアのホークスベリー市と長く中学生・高校生の交流をしてきた。相互に1か月滞在する事業を今までは6人募集していたが、予算削減のため今年度から5人に減らさざるを得なかった。この5人の枠でさえ、以前よりも長い期間で募集したにもかかわらず3人しか集まらなかった。アンケート結果をみるとこどもの教育費にとっても困っていることがわかる。この事業では25万円の航空費を保護者が負担しなければならない。さらに、9月になったらオーストラリアからやってくるこどもを1人迎え入れることになる。魅力は感じるけど金額面などで無理だと感じたご家庭があったことと思う。こういう状態が続くと協会としてもこの事業の継続が難しくなる。お金が理由の全てではないかもしれないが、貴重な機会が奪われてしまうということも起こっているということを報告させていただく。

**委員：**アンケート結果報告書の87ページのA29にある子育て支援に関する自由記述がメインになる質問だと思っている。この回答結果が「等」と形で全部書かれていないということは、アンケートを書く側としては本当にかっかりする、答えたくない理由の一つになる。一番大事なところだと思うので再度全部出していただきたい。本当に訴えたい人が答えたいようなアンケートを作っていただかないと若者はそっぽを向いたまま町からでていく。本気で書いてくださっている方もいらっしやるので、全ての回答を公開していただきたいと思う。

**事務局：**ご意見のとおり、報告書としてはテーマごとにまとめて件数としてだしている。回答の全文や回答者のお住まいの地区といったことは把握しているため、後日お示しさせていただく。

**会長：**これらの議論をこれからのこども計画の施策に盛り込むよう検討していただきたい。

## 8 事務連絡（次回予定）

【第2回審議会日時】令和7年9月18日（木）午後1時30分～

## 10 閉会あいさつ（副会長）

**副会長：**若者に対するアンケート調査の回収率の低さについて、たくさんのご意見をいただいた。町が施策を考えていくうえで、さらに多くの方から意見を聴きたいと思う部分についてのみでも、なにかの形で、紙面でなくてもアプリやウェブ回答でもいいので切り込んでもらうよう、事務局と会長・副会長で検討させていただくということでよろしいか。

意見を伝えるために必要なこととして、こどもたちは自分の意見を伝える場所がほしいとの答えが多く、一方で若者や保護者は自分の意見がどう反映されているのか、活用されているのかがわからないという回答が最も多かった。これまでの審議会でも、答えたアンケートはどうなっているのかというところが大事だという意見が出ていた。今回のアンケートの結果こうなったので、さらに教えてほしいという形で若者からの意見を吸い上げができるといいと思う。

昨年度からお世話になっている委員のみなさん、本年度から新しく委員になられた子育てサークルや保護者のみなさんから積極なご意見をいただいたので、今後の参考にしていきたい。アンケートの回収率は低かったが、アンケート結果から京丹波町のこどもや若者は生活への満足度や自己肯定感が高くはないと感じた。一方で自分を受け止めてくれる場所が自宅や学校、地域にあるという回答や、他人を助けたいという回答が高かった。京丹波町のいいところで、少人数教育で一人ひとりを大切にしていると感じていただいていた結果であると思う。自己肯定感や京丹波町で生活することの満足度を高めていけるように、私たちもいろいろ情報を集めて深く考え、審議をしていけるようにしたい。委員の皆さまそれぞれのご意見を持って、次回の審議会にお集まりいただきたい。